



第1回

麒麟か反逆者か「明智光秀」

講談師 一龍齋貞花

麒麟も女優のクスリに勝てず、正月早々足止めをくらい、二週間遅れの大河ドラマ。光秀の力で昨年のいだてんを挽回出来るか。麒麟が驚馬にならないことを祈ろう。



「光秀、お主はここから落ちよ」

「叔父上は」

「わしはこの城の最後を見届ける。明智の家を必ず再興してくれよ。早う行けっ」

「ハッ、おさらばでございます」

斎藤道三に与していた明智は、斎藤義龍のためにあえなく敗北、明智城落城」

家族と共に城を逃れた光秀は、浪人となり流浪の旅がはじまります。

明智家十一代十兵衛光秀は、美濃源氏土岐一族の明智家十代光綱、於牧の方の間に、享祿元年（一五二八）岐阜

県可児の明智城に生まれたというのが一般的ですが、明智城の出城落合砦跡に案内板があり、大永六年（一五二六）三月十日生れとあり、他にも永正十三年（一五一六）生れという説もあり、なんと十二年も違いがあります。

出生地も、可児市、恵那市、瑞浪市、山県市、大垣市、滋賀県多賀町説まで。

光綱の妹の子として生れ、養子になった説もあり、謎の多い武将。光秀の叔母小見おみの方が、斎藤道三の後妻となった縁で光秀は道三の近習として仕え、道三と小見の方の間に生れたのが濃姫。二人はいとこ同士の関係にあり、大河ドラマはこの設定で始まりました。

光秀に、斎藤家に仕えている妻木家の長女熙子ひろことの縁談が。親同士が決めた縁談でしたが、お互い気に入り婚約を待つばかり。ところが、熙子が痘瘡

にかかり、美しかった顔にあばたが出てしまった。申し訳なく思った父は熙子の代わりに妹を嫁がせようとしたが、

光秀は

「人の容姿は変わっても、心の美しさは生涯変わらぬものです」

と、熙子を妻に迎え、これを聞いて熙子は嬉し涙を流します。こうして結婚した二人でしたが、幸せは長く続きませんでした。主君道三が、息子義龍との内乱に敗れ、二人は幼い子を抱えて諸国を流浪、その間のことはほとんど記録が無く、極貧の生活を送っていたようです。熙子は縫物をしたり、商家の子守りや手伝いをして、無収入を夫を支えます。そんな或る日、連歌の催しを開く機会を得、主人となって出席者を接待しなければならなくなった。貧しい光秀にはそんな金はありません。

ん。途方に暮れる夫に、

「お金は、私が何とか致しますからご心配なく」

連歌の席に次々と料理や酒が運ばれ、催しは大成。参加者は皆満足して帰っていきました。

「熙子有難う。お陰で面目が立った」

「なによりでございます」

と、下げた熙子の頭から巻いていた手拭が落ちた。

妻の顔を見て光秀はハッとしました。

艶やかな緑の黒髪が短く尼さんのような頭。

「熙子・・・」

自分の黒髪を売って、接待の費用を工面したのです。妻の手を取り、

「すまん。もう少し辛抱してくれ。私は必ずお前を幸せにしてみせる。頼む」



この連歌の会がきっかけとなり、越前朝倉家へ。

「その方、なにか申し立てるものがあるか」

「ハイ、鉄砲をいささか」

鉄砲の腕を披露し、その見事さに五〇〇貫の知行を与えられます。鉄砲の修行をしたという記録はありませんが、明智城内にて腕を磨いたのでしよう。側室を持つのが当たり前の時代に、光秀は側室を一人も持たず熙子を愛し、熙子も一心に夫を支えます。

二人の間に三男四女の子ども。玉、後の細川ガラシャは三女です。

夫が山崎の戦いで秀吉に敗れたと聞くと、熙子は坂本城の金庫、倉庫を開き、残った家臣に総て分配して城を退去させると、自害して夫のあとを追いました。この時四十六歳。

戦乱の世を駆け抜けたおしどり夫婦でありました。

良き妻を持つには、良き夫であることですね。

「私、今頃気付いても遅いんですが。朝倉家に仕官するまで浪人生活六年間。この間諸国を見聞したことが後の大きなプラスになります。」

義景、義昭の家来から
信長の家来に

永祿九年（一五六六）將軍足利義昭が、実力者朝倉義景を頼って転がり込んできた。ここに頭脳明晰な光秀が二人の仲を取り持ち、將軍義昭にも目をかけられ、二人の家来のような立場であったとも、義昭に仕えたとも言われます。

義景が中々腰を上げようとしなかった。この間にどんどん勢力を伸ばした織田信長が、上洛して天下取りの方策として、義昭に將軍職の地位を確立させようと接近。ここで義昭に仕える光秀をみて、この男使えるとヘッドハンティング。光秀も、信長こそ天下取りに進む人と、義昭、義景を見限って信長の家来に。出世するには誰に従うのがいか。社内でもどの部長にしようかなんて。ところが今の若い社員は、上役に結婚式の仲人を頼んで、その上役が左遷されれば同様の憂き目にあう恐れがある、と、上役に頼まなくなった。ところが依頼しなかった上役が出世すると、「あいつは、俺に頼まなかった」と冷遇される恐れもある。ならばと特別な恩師でもないのに先生に依頼、いやそれも面倒と仲人を立てないケースが

増えた。マア出世したけりや成績を上げることに第一ですが、秀吉のように相手の性格をつかんで仕える。今はそんなこと面倒とやらない若者が増え、嘆く重役がいっぱいいますね。

信長は、当初義昭を將軍として立てていたが、やがて「天下のことは自分に任せろ」という申し出に、

「冗談じゃない。おのれ將軍の余をなかがしろにするとはけしからん」

と二条城で拳兵。光秀は信長の家来として戦います。信長にかなうはずなく和議を結ぶも、再び兵を挙げたものの、信長に攻められ総ての官位を剥奪され室町幕府滅亡。

元亀元年、信長越前へ兵を進め、金ヶ崎城を攻略。ところが妹のお市を嫁がせ同盟関係にあった浅井長政が、嫁の実家より以前危機を救ってくれた義を重んじ朝倉に味方し、信長をはさみ討ち。

信長ほうほうの体で逃げ帰ります。この時、殿軍をつとめた秀吉が無事に信長を逃したことで信長の信頼をかちとります。

姉川の合戦に勝利を取めた信長は、翌年比叡山焼打ち、山内の建物、經典残らず全焼、僧侶から女性、子供までことごとく殺害、正に目も当てられぬ有様。この焼打ちに手柄を立てたのが光秀。

「光秀大義であった。その方に志賀郡を遣わす」

「ハハッ、有難き幸せにございます」
石山本願寺攻めにも功を立て、現在の大津市比叡山の麓、山中を越えれば京都の白川という交通の重要地点坂本城を建てます。坂本城は天守閣があり、豪壮華麗で安土城に次ぐ名城と言われ、光秀は城づくりにも長けていたようです。

中途採用された光秀は、比叡山焼打ちに手柄を立て大出世を遂げ、小者からの上がった秀吉より上位になり、以後秀吉も負けじと働きライバル関係となつていったのでございます。
京都所司代村井貞勝と、京都の支配を担当し両代官と称せられたほど。

信長の家来として大働きをした光秀が、なぜ信長に敵意を抱いたか。考えの違うのか、あるいは信長のパワハラなのか、次回そのあたりを検証してみましよう。